
The dawn of new era. (**新世紀の夜明け**)

浜口早苗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The dawn of new era. (新世紀の夜明け)

【Nコード】

N5304N

【作者名】

浜口早苗

【あらすじ】

グローバル・ウォーミング、人口増加、多様性の欠如 e t c . e t c . . .

世界は、人類は絶滅への道をたどっているのか。。。

100年後の世界を背景に、人類滅亡に歯止めを掛けるために、日本は、世界は、共に立ち上がった。。。

The beginning

遠くに瞬く星、その何処かに私達の求める「何か」があるのだろうか？

「世界は、人間たちで溢れかえってしまっ、もう行き場がなくなってる。夢も希望も何処に求めていいのかも、分からなくなっている。それは、滅亡へと続く道でしかないのかしら。。。」

千鶴は答えが欲しくてそうだったのではない。当然彼には応えられないのは分かっていた。誰もが問いかけたい事なのだから。

「そういうの、やめよう。俺たちが考えて分かるものではないんだから。」

昨日の夜の2人の会話。

でも知りたい。希望も夢もなくして、何も知らない振りをしてただ生きていくだけなんて。見てみない振りなどではしない。どちらが本当の世界か分からないけれど、見たまま以外の世界があるなんて知らなかったあの頃。毎日が楽しい日とそうでない日だけに分かれています、太陽が昇って沈んでいく。それは、地球が太陽の周りを回っているように、太陽が地球の周りを回っているように、あまり関係の無い世界。

情報がこんなに溢れかえる世界で、見たくもない世界の細部の光景を目の当たりに見ることができても、知らない振りができるんだろうか？

彼が全く考えていないのではないことは、分かる。考えてもやはり、どうにもならないことに逆にいらだっている。それが分かるから、あえて彼女は問いかけたかった。きつと何処かに答えがある。そしてそれを、共に探しに行きたい。ただ、それだけ。

翌日、いつものように会った。昨夜は、千鶴が誘って彼を呼び出した。けれど、何も進展がないまま、会話も少なく、別れたのだった。

小沼千鶴と彼、野田裕之二人は、同じ国の機関で働いている。

彼女は肩の力を抜いて、昨日とは違って、さりげなく聞いた。

「この間の夏休みは、どうだった？ エンジョイできたのかしら？」
できる限りそっけない振りをして聞いた。本当はいろいろ問いただしたいことがたくさんあったけれど。

野田裕之はこの夏、一人でヨーロッパへふらりと出かけていった。当然、人の休暇にとやかく言う筋合いではない。けれど、この時期にそれほど長いとは思えない休暇にヨーロッパを選ぶなんて、思っていたのだ。彼にしては意外な行動だった。

「ああ。。。いろいろと考えたよ。これからのこととか。」
これから・・・って？

野田と千鶴、2人の他3名が同じスペースシップに乗って数ヶ月間行動を共にしなければいけないミッションが待っていた。

その行き先はまだ誰にも告げられてはいなかった。

噂によれば、かなり困難なミッションらしい。

5名とも訓練を積んでいるかなりのベテランばかりだったが、今回

は数ヶ月も狭い場所で暮らさねばならないのだ。

「そういえば、マークからメールが来ていた。今度のミッションの件で。見た？」

彼は首を振った。

マークはアメリカでの同様のミッションのメンバーでもあり、二人のよき理解者でもあった。そういえば、今度のメンバーの南波佑介とも面識があるようだ。

「彼はなんて言ってきたの？」

「なんだ、メールソフトも開けてない訳。。。彼はね。。。」
と、その時、背後から声がした。

「やあ、こんなところにいたのか！ 随分探したよ。今度のミッションのメンバーに招集が掛かったんだよ。二人ともすぐに来てくれ。」

声を掛けてきたのは、今回数ヶ月を共にするメンバーの1人、南波佑介だった。彼は南波とは面識があった。一度、別のミッションで行動を共にしたのだった。

南波と共に、指定されたという505会議室へと向かった。

南波と野田は、どこか馴染んでいる。言葉としてちょっと語弊があるかもしれないが、二人とも地方出身である、というところに共通意識があるのかもしれない。

今の時代、地方とか、都会とか、そんなものにこだわるのか？と、思うのは、都会出身者だけなようだ。というのも、今回のミッション

ン5名のうち、東京出身でないものは、この2人なのだった。

「南波さん、今回僕が同行するって事、他の2人はまだ、知らないんですよね？」

「ああ。。。でも、気にすることは無い。君は、最高司令官からのたつての推薦だったし。。。」

「でも、日本の司令官殿はちょっと不安がある、と言っていると聞きましたか。」

「例えば彼に異論があろうとも、世界の司令官からの推薦じゃ、異論もくそも無いだろう。それに君は、他の4人に持っていないものがある。自信を持ってよ！」

彼は、それでも躊躇していた。部屋にはいるのを。

実は、彼のほか4名は、実績、経歴ともに、申し分が無かった。4名といっても、千鶴の場合は、この機関で働く事にインターバルがあるのだった。それが元で、彼と知り合うことになったのだけだ。

彼は、日本のトップアスリートの1人で、ハイスクール卒業後スポーツ界にはいり、暫くはそこでプレーをしていた。日本を離れ、海外で活躍をしていたのは、他の4人と同じ。けれども、この分野での知識は全くなかったところが、他の人とは全く異なっているし、世界の最高司令官であるフーバー自信が推薦しなければ、この機関にはいることはなかったのである。

ここは、宇宙開発機構日本支部。要するに飛行士養成機関である。ここである程度の訓練を経て、飛行士としてスペースシップに搭乗し、様々な任務をこなすのである。

選ばれるのは、各分野での専門的知識を持った経験者で、主に推薦

された者達だ。

フーバー自身による推薦は異例のことであつたのは言うまでもない。彼が何故、フーバーに選ばれたのか。

それは、彼の持っているエスパー能力の高さ、であつた。

当然、他の4名にも各分野の専門知識も当然あるが、テレパシー能力はこの時代当然のことながら、あるレベルの超能力は要求されるのだ。

「さあ、入れよ」南波に促されて、彼は漸く開いた扉の向こう側へと足を踏み入れた。

部屋には既に2人がいて談話をしていた。彼は、この二人と機関の建物の中で顔をあわせたことはあるが、直接話をするのはこれが初めてだつた。

「やあ！ 始めまして。三葉友之です。よろしく！」

まず、野田達に握手を求めたのは、南波佑介と同じテクノロジー分野の三葉であつた。彼は主に米国で名前を知られていた。南波は欧州だつた。ここに来る前までには二人とも世界的に著名になつていたけれど

。その後、鷹埜が握手を求めてきた。

「鷹埜浩平です。君が現役時代の頃にはよく試合は見ていたよ。前々から君とは話がしてみたかつたんだ」

鷹埜は工学の分野のエキスパートで、実はここに推薦される前にパテントにおいてのトラブルから裁判沙汰になつたことがあつた。しかし、その後の功績から再評価されたのだつた。

裁判沙汰になる前までは、日本ではトップクラスで、海外にもその名は知られていた。

「お二人とも久しぶり！ 5人目のメンバーを知ったのは今日だったの？」

既にこの3人と面識のある千鶴は、この二人に尋ねてみた。

鷹埜と三葉はお互い顔を見合わせて頷いた。そして南波の方を見ながら、

「こいつに聞いたんだよ」と三葉が言った。

「何故、司令官は5人目のメンバーを今まで伏せていたんだ？」

「余計なプレッシャーを野田君に与えないための配慮だろう。妙な噂が立つのを避けたかったんじゃないか？ だいたい何処へ行くのか、どれくらい掛かるのか、まだ何も詳しいことは発表されていないからね。」南波が応えた。

「このミッションだけよね。詳細がメンバー達にも知らされていないのは。。。」

「君は知っていたんだろ？ 彼がメンバーだと言うことは。当然。教育係であるんだからな。」
三葉が意味ありげに千鶴に尋ねてきた。

「そうね。もちろん。榊枝司令官から聞いたのは、私よ。」

何故三葉がそういう風にたずねてきたのかには、訳がある。

彼女自身は一度この機関に推薦され働いていたのだけれど、暫く遠ざかっていたのだ。その間に野田と、彼まだがトップアスリートとして活躍しはじめた頃に知り合ったのだった。

その後、彼女がこの機関に復帰した後、野田が現役を退いたのをきっかけにフーバー司令官が彼を誘い、この機関へ入ったのだった。しかし、スポーツ選手が配属されると言うことは前代未聞であり、かなり異例なことであったため、暫くの間、彼女が野田にこの機関での教育を担当したのだった。

「榊枝司令官から直接私に指令があったのよ。彼にとっては初めてのミッションではないのに、何故直接彼に言わなかったのか。。。ちよつと疑問だったけれど。」

「では、君もまだ今回のミッションについては何も知らされていないのか？」

三葉がそう尋ねたとき、ドアが開いて榊枝司令官が入ってきた。

「今回のミッションに関しては、今日ここで全員に通達をする。そのために君達に集まってもらった。」

彼は入ってくるなり、そう言った。彼女達の会話を耳にしたからだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5304n/>

The dawn of new era.（新世紀の夜明け）

2010年10月8日16時12分発行